

気仙沼の環境整備ボランティア

港町を愛する思いがよみがえらせた古社を明日へ継ぐために。

津波の爪痕から多くを学び 伝承の意義を再確認



写真上／参加者みんなで整備を揚げた杉ノ下地区の慰霊碑 写真下／境内に生い茂る雑草を熱心にもめる参加者たち

港町の大切な集いの地で 気仙沼の再生を願う清掃活動

バスは、最後の目的地「景園（いづけい）まじき神社」に到着。ここも津波によって壊滅的な被害を受けたが、ご神体が無傷で発見されたことで、困難の最中であつた地域住民の心に再建への熱意が生まれ、2013年3月復活を果たした。今では、併設された公園とともに、地域における集いの場として賑わいを取り戻しつつあり。

参加者はそれぞれ作業用の手袋をはき、境内の草取りやゴミ拾いに取り組みました。約1時間の作業を終えると、境内はスッキリとした印象に、活動を終えて安堵の笑顔を浮かべる協会メンバーの福岡麻生さんは、「復興途上の気仙沼を知ってもらった皆さんは、これから変わっていく姿を見守ってほしいですね」と、参加者たちの再訪に期待を寄せていました。



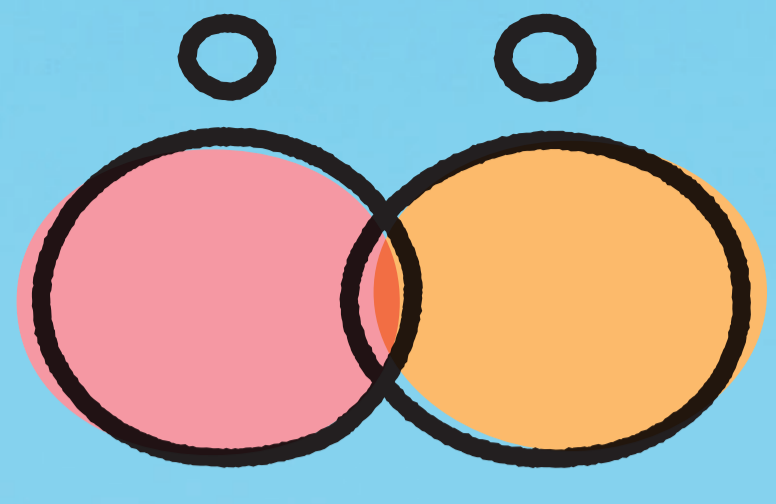
展望台の上で津波が押し寄せた地域を説明



作業の締めくりに笑顔で記念撮影

震災遺構の保全と運営とともに 教訓を未来へ託す伝承活動

今回のボランティアツアーのような被災地域の清掃活動や、個人団体による支援の受け入れマッチングなど、多彩な活動を展開してきたKRA。津波被災者や写真の修復やアーカイブ化を行う写真救済館の取り組みも推し進め、2月9日には河北新報社での「思い出の出張閲覧会」を行いました。地元を離れ、なかなか気仙沼に足を運べないという機会を待っていたという来場者の声も聞き、開催の意義を感じましたと福岡さん。そして、気仙沼洋高校の旧校舎を利用して震災遺構となった「気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館」が3月10日にオープンすることを、現在KRAはこの施設の運営業務に携わっています。ボランティアの受け付けは、且お休みをいただき、伝承館を拠点にした震災の記録や教訓を多くの人々へ伝える取り組みに力を入れていると思っていまふ話してくれました。



今できることプロジェクト

2018年度

学びを糧に、新たな未来を。

月日の経過とともに薄らぐ東日本震災の記憶。

たとえ時を重ねようとも、
私たちは「今できることは何か」を考え、
時節にふさわしいテーマで復興に関わる人々や取り組みに学び、
歩みを続けてきました。2018年度に掲げた活動テーマは4つ。
河北新報の読者の皆さん、賛同企業の方々、
たくさんの参加者が一緒になって、
このプロジェクトが前進してきました。その軌跡を報告します。

地域の魅力 発信支援

果実の豊かな実りに 賑わいを取り戻す山元 明るい希望を重ねて。

完全イチゴの魅力を求めて 大災害に備える山元町へ

特産のイチゴ栽培を復活させるなど地域の底力を発揮し、着実に復興への歩み続ける山元町。2015年度の活動でも協力いただいた「やまと語り」の会の渡邊修次会長をガイド役に、町を巡るバスツアー12月1日に行いました。

最初に訪れたのは、みんな待望の「山元いちご農園」。ここでは、大きなニールハウスの中でたわわ実ったイチゴの摘み取り体験を楽しみました。おいしく熟した味からは、新たなスイーツ製品の開発など6次産業分野の躍進を目指す意気込みが感じられました。



完熟イチゴを味わう参加者たち



次は、震災遺構として保存が検討されている「田中浜小学校」。震災当時校長を務め、現在はやまと語りへの会の一員として活動している井上剛さんの案内で、崩れ落ちた外壁などが4回も襲った津波の威力を伝える校舎を見学しました。



平常時は地域の交流拠点として利用でき、非常時は防災拠点となる山下駅前、防災拠点 山下地域交流センターも訪問。ここでは、やまと語りへの会が取り組んでいる「幸せの黄色いイチゴプロジェクト」について説明を受け、参加者も各自分用の一枚に震災の教訓を受け継ぐ決意を。また、岩佐勝所長の支援メッセージをつづりました。また、岩佐勝所長のガイドでバックヤードツアーも実施。大倉蔵の備蓄庫、4400人に3日間水を供給できる耐震性貯水槽や非常用出入り口などを見学しました。



写真上／屋上まで波が押し寄せた「田中浜小学校」 写真中／「防災拠点」山下地域交流センターの備蓄庫 写真下／参加者、やまと語りへの会、風雲乱打陣、平松さんで記念撮影

イチゴジャムをお土産に 太鼓と歌で感動のフィナーレ

このバスツアーで最も好評を博したのが、「山元いちご農園」のイチゴを使ったジャムづくり。岩佐社長が指導を行いながら調理にチャレンジし、瓶詰めまで行いました。それを完成した瓶を手にしながら、みな満更のような笑顔を見せてくれました。

町役場敷地内にある「山元中央公民館」では、地元の創作和太鼓集団「風雲乱打舞らんむ」が、行舟を出迎え、迫力満点の演奏で参加者を圧倒しました。そして、シンガーソングライター平松愛理さんがサブライズで登場。大ヒットソング「部屋とシャツと私」など4曲を披露しました。ラストに演奏した新曲のありがたとしては、参加者も手拍子とともにメロメロの、ありがたさ。

新たな観光の拠点施設が 坂元駅前ニューオープン

イチゴの町、山元にうれしいニュースが、震災以降、坂元駅前を営業を行っていた山元町農産物直売所夢のこの郷が、「R常磐線坂元駅前」に本設店舗として2月9日にリニューアルオープンを迎え、当日、町内外から約1万4000人の買物客が詰めかけた大盛況のスタートを切りました。館内には、特産のイチゴやリンゴなどもちろん、磯漁漁産の水揚げさしほぐ貝などの海産物、採れたての地場野菜、バラティエ豊かな加工品が集まり、まさに地域の魅力がたっぷり、株式会社やまと地域振興公社取締役（元）の馬場健徳氏（たけやま）さんは、「町の新たなニューオープンである、やまと夢のこの郷は、地元の農水産物など地場産品の直売だけでなく、町の観光スポットなど情報発信基地としての機能も担っています。今後はイベントの開催や品揃えの強化を行っていきますので、皆さまぜひお越しください」と、メッセージを送っていました。



関係者と坂元小学校児童によるテープカット

こども未来 応援教室

知識や興味の幅を広げて 目指すべき将来像をイメージ

地域の将来を担う子どもたちを応援する本プロジェクトの企画でも、未来応援教室。今年度は、2月17日に仙台育英学園宮城野キャンパスで開催し、約130人の子どもたちが参加し、職業体験などを通じて将来の夢を膨らませました。



Pepper(ペッパー)のプログラミング教室/ソフトバンク 「お金のひみつ会社って、株式会社なあに?」ワーク 自動車整備士ってどんな仕事だろう?/宮城県自動車整備協会

プロジェクトはこれからも さらなる進化を目指して進んでいきます。

今できることプロジェクト2018年度の活動は、たくさんの参加者たちと学びを積み重ねながら、より大きな成果を得ることができました。そして、一年の活動で得られた課題や反省を糧に、より奥深く発展させた新たなプログラムを企画しています。真の復興のために今、何ができるのかを読者の皆さんと一緒に考え、その思いや学びを共有しながら、より大きく輪を広げていきたいと思っています。

19年度の活動は、河北新報紙面やホームページ、フェイスブックでお知らせいたします。リアルタイムの情報は、フェイスブックの記事でお伝えしていきますので、引き続きご覧いただけますようお願いいたします。

皆さんは今、どんな支援活動をしていますか? どんなプログラムに参加してみたいですか? 復興の実情を、どう感じますか? 皆さんの声を、今できることプロジェクトのホームページにお寄せください。

www.kahoku.co.jp/imadeki/ 河北 今できること 検索

facebookページもあります。

防災情報 発信支援

若者たちの前向きな姿勢に 大きな期待を得られた機会に



若い世代同士で互いに共感しながらトークが展開

3月10日に仙台国際センター1展示棟で開催された仙台防災未来フォーラム2019。本プロジェクトでは、若者たちが震災と防災について学び合う伝承講座「311 11年を振り返る」を企画し、会場で行いました。司会進行は人気パーソナリティー、本間秋彦さんが務め、次世代塾の第二期受講生である河辺千尋さん安田琉菜さん堀美祐さんが登壇。さらに、神戸市で阪神淡路大震災の語り部活動を行っている中村翼さんをゲストに迎え、次世代が担う震災伝承をテーマに語り合いました。



現地で感じ、学んだことを革面にレポートする受講生たち

女優・岩田華怜さんと次世代塾受講生らで事前に東松島市野蒜地区の各地を訪問し、被災地レポートを発表。最後に、全員参加でトークセッションを行い、震災の教訓を未来へ継承するために、若き世代の担い手が手渡し感覚で情報を共有する大切さを確認しました。

